日本弁理士会　副会長
山﨑　高明

弁理士とコンピュータ

今月のことば　*monthly word*

いまや弁理士が仕事をするうえで，コンピュータは必要不可欠のものになってしまいました。もちろんコンピュータが必要不可欠である職業はたくさんありますが，弁理士も御多分に洩れず，そのような職業の一つです。

そのような状況ですから，日頃からコンピュータについてはいろいろと考えさせられてしまうわけです。もともとコンピュータに興味があるわけでもないのに，仕事をしてゆくうえで考えることを余儀なくされてしまうわけです。

始めに断っておきますが，私はコンピュータに関しては全くの素人です。これからコンピュータのことを書こうとしているのですが，きちんとした教育を受けたことはないし，正確な知識も不十分ですので，かなりいい加減なことを書くかもしれませんが，その点はご容赦を戴きたく，よろしくお願いします。

私が特許事務所で仕事を始めたのは22～3年前ですが，その頃は，「弁理士の仕事は電話と鉛筆があればできる」なんぞと言われておりました。これは少々極端な物言いだと思いますが，当たらずとも遠からじで，だいたいそんなものだったと思います。

ワードプロセッサ（以下，「ワープロ」という。なんてここでは書きたくないです。）の専用機が導入され始めたころで，ワープロを使う人と使わない人とが混在している時代でした。ワープロを使わない人は，手書きで原稿を起こして，外注の和文タイプライタの人に打ってもらっていました。まさに「電話と鉛筆」だけです。あと，紙と机も要りますけど。いまの人は「和文タイプライタ」というものがあったこと自体を知らないでしょう。ところで，和文タイプライタを打つ人はなんという職業だったのでしょうか。「和文タイピスト」でしょうか「和文タイプライタライタ」でしょうか。やはり和文なので「和文印字機操作者」でしょうか（すいません）。

そのころのワープロといえば，私の知る限りでは（メーカ名は書きませんが）「親指シフト」キーボードが主流で，記録媒体として5インチのフレキシブルディスクを使用するものでした。「親指シフト」が主流だったのは，ローマ字入力に比較して，単純計算で約2倍の速さで入力できたからだと思います。実は私は，現在でも，デスクトップパソコンには「親指シフト」キーボードを使用しております。そのためにローマ字入力は他の人より遅いです。

その後は「ワープロ」は「パソコン」に取って代わられ，また，「オンライン出願」が始まると，特許事務所は数百万円という莫大な設備投資を迫られることとなり，とても「電話と鉛筆だけ」などとは言っていられない状況になってゆくのです。このころから，弁理士とコンピュータとの関わりが本格化してきたものと思われます。つまり，コンピュータの役割は，「文書作成」に留まらず，「出願」つまり「書類提出」にまで拡がってゆくのです。

さらにその後，「パソコン出願」，「インターネット出願」になり，設備投資は軽くなりましたが，個々の弁理士とコンピュータとの関わりは，より濃密なものになったと思います。

また，継続研修（いわゆる義務研修）が開始され，物理的及び時間的制約から，大半の研修は

「ｅラーニング」で受けることとなり，コンピュータ及びインターネットが必須の設備になってしまいました。

ここまでの推移は残念ながら大幅に端折りましたが，要するに，現在のコンピュータの役割は，少なくとも「文書作成」「書類提出」「研修受講」に亘っており，これらをコンピュータを使わずに全て行うのは事実上不可能と言えるでしょう。

「パソコン出願」から「インターネット出願」に移行したことによる最も大きな変化は，ユーザの立場から言いますと，「電子認証」のことではなく，回線がISDN必須ではなくなったことだと思います。インターネットに接続されれば何の回線でもいいので，無線LANでも携帯電話でも，なんとかWiMAXでも出願ができてしまいます。

そうすると，電車の中からでも出願ができて便利なので，実際そうする人も少なからずいるでしょうから，「送信中の回線遮断」という事故が「パソコン出願」のときより増えているのではないでしょうか。送信したつもりで，実は途中で回線が遮断されて未送信になっていて，これに気付かなかったとしたら恐いことです。注意しないといけません。

なお，「電子認証」の発行事業から続々と撤退が始まっていることは少々心配です。「電子認証」の制度は維持できるのでしょうか。

コンピュータを使っていて困るのは，数年ごとに機器を入れ替えなければならないことです。私たちは，OSやソフトのバージョンアップを永遠に続けなければならないのでしょうか。また，コンピュータを入れ替えるときのデータの移行や，ソフト及びいろいろな設定の再インストール及び再設定が面倒で，気が遠くなります。私は，ずっと同じものが使えるならばそれで構いませんけど，皆様はどうでしょうか。

個々のコンピュータにはインストールも設定もなにもせず，そういったものは全て共用のサーバ上に記憶しておいてもらって，個々のコンピュータは単なるサーバとの通信手段，ということにすれば，このような煩雑さからは解放されるのでしょうか。

もう一つ，現代のコンピュータを使っていて困るのは，セキュリティ維持のためにコンピュータの能力のかなりの部分が使われてしまうことです。ウィルス対策ソフトが動いていることは多かれ少なかれ負担になっているわけですし，もっと困るのが，「セキュリティのための更新」とやらを予告なく勝手に始めてしまうことです。これが始まってしまうと，私のパソコンは最新のスペックのものではないので，処理速度が格段に落ちます。急いでいるときは非常に困ります。この「更新」は，OSも行うし，ウィルス対策ソフトも行うし，その他の一般のソフトも行うことがあって，ひどいときは，「更新」と「ウィルススキャン」とが同時に行われて，ほとんど動かなくなってしまうことさえあります。

コンピュータの電源を24時間入れっぱなしにして，「更新」や「ウィルススキャン」は深夜に行うようにするのがいいのでしょうが，そのような状態で放置することは，それこそセキュリティの点でなんとなく心配です。困ったものです。

ウィルスやスパイウェアやスパムメールといったものは，いくら対策をしても鼬ごっこで，根絶するどころか増え続けます。全世界で送受信される電子メールの8割以上はスパムメールであるというデータもあるそうです。

いつか，「更新」や「ウィルススキャン」の負担がコンピュータの能力の進化を追い抜いてしまうのではないでしょうか。そうするとどうなるか。コンピュータは，その能力の大半を「更新」や「ウィルススキャン」のために費やし，その他のことはほとんどできなくなってしまうのです。

コンピュータに言わせれば，文書作成だの図面作成だの，そういうことは余裕のあるときならやってあげるけれども，セキュリティの危機に対処することが最優先，かつ，最重要の任務である，ということでしょう。セキュリティの危機，つまり，コンピュータ自身が破壊の危機にあるときに，なんと呑気なことを言っておるのか，と言われそうです。こうなってしまったら，いくらお願いしても文書や図面は書いてくれないんでしょう。「コンピュータの叛乱」は，実はこのようなものかもしれません。